土佐派絵画資料肖像粉本目録発刊にあたって

館長　田村 隆照

京都市立美術大学として発足当初から7年間、その職にあった初代学長長崎太郎氏は、教授スタッフの充実に盡力されたが、また参考品の購入や寄贈受入にも積極的な努力を傾けられた。この土佐家に伝来した資料も、当主土佐光輝氏の転居にあたり、欣魚洞主人松井佳一氏が一括購入したものを、長崎学長を介して、美大（本学）に寄贈され図書館に収蔵されたものである。確か昭和30年頃と記憶しているが、当時土佐家の粉本といえば平等院鳳凰堂の扉絵のうつしが有名で、授業にもしばしば使用させていただいたものである。その後本学出身の画家を中心に、平等院の新造の扉に復原模写が行われた際、田中訥言の模写と共に貴重な資料として使用された。収蔵以来30数年間に亘ってこれら粉本の整理が続けられ、また乏しい予算の中から裏打ちなど施されて、漸くその一部が展示可能な状態になったものである。その間肖像画の下絵あるいは手控え、画稿などが学界に発表され、その研究成果を通して改めてこれら粉本資料が注目されることになった。

堺在住時代の土佐光吉、光則の下絵を含む他、土佐家代々の肖像下絵によって没年銘の確認ができる点や、足利将軍の肖像や当時の有名な文化人の肖像、とりわけ茶人千利休をはじめとした堺の町衆の表情を伝えるなど、元絵所預としての伝統と高い画格を物語る資料である。とくに画帖に貼布されている肖像手控えは、永い期間に亘る伝統的画技の確かさを見る思いがする。

今回創立110周年記念収蔵品展として四条ギャラリーで展示されるのを機会に、その目録がまとめられたことは望外のよろこびである。更なる土佐家資料目録公刊のきっかけとなることを期待して発刊のことばとするものである。